The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	住宅地観からみた住環境の変容構造に関する研究
Author(s)	角野, 幸博
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33870
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【31】

氏名・（本籍）	角野幸博（かどの ゆきひろ）
学位の種類	工学博士
学位記番号	第 6467 号
学位授与の日付	昭和59年3月24日
学位授与の要件	工学研究科 環境工学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**住宅地観からみた住環境の変容構造に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教授 上田 篤 教授 川崎 清　教授 岡田 光正

論文内容の要旨

本論文は，住宅地観という新しい概念を導入して，住宅を所有しようとする人間の観念を含む住宅獲得行動からみた専用住宅地，とりわけ戸建住宅地における環境構造の変化とその問題点について述べたもので，序章，本篇9章，結章及び展望からなっている。

序章では，住宅地および住宅地観の成立過程を，主に近世以降のわが国について概説している。

第1章では，大阪都市圏における戸建住宅地開発の実態を人口増加との関連で分析し，市街地拡大過程における戸建住宅地の役割について論じている。

第2章では，つづいて大阪都市圏で開発された戸建住宅地の平面図を時系列的に比較検討し，戸建住宅地の空間構成や施設立地に対する考え方の変化を考察している。

第3章では，戸建持家居住者の住要求構造を明らかにするために，住機能以外の意味に対する期待と住要求の優先順位について考察している。

第4章では，3章と同じ調査対象について，住宅地観の具体的表現である住環境に対する実際の評価と老後の不安項目を調査している。

第5章では，住宅地に望ましい空間的要件として，施設の混在や計画外空間の発生に対する意向を千里ニュータウンの居住者を対象に調査し，特に戸建持家居住者の特徴を他の住居形式と比較している。

第6章では，住宅情報誌の記事分析によって，供給者が住宅地の評価をどのように行っているかを検討し，購入者の関心をひきつける項目の内容や，その地域差を明らかにしている。

第7章では，開発がすでに進行している大阪府北部地域と，未開発の南部地域のイメージを比較することによって，住宅地に対する総合的な評価結果と地域イメージとの関係を明らかにしている。

第８章では，戸建住宅地に対する財産としての価値観が，現実の住宅地の変容に与えた影響を，所有権移動と宅地の細分化の視点から考察している。

第９章では，住宅地のイメージを保存しようとする自律的な力を「場所イメージの慣性力」と定義し，所有権流動化の中でも，住宅地に対する価値観が住宅のデザインを規定していることを述べている。

結章では，前章までの分析をもとに，住宅地観の発達過程とその構造をまとめ，さらに住環境に与える影響について，特に住宅地のイメージ較差，宅地の流動化と細分化，場所イメージの慣性力の発生の３点から考察している。

展望では，住宅地観を考慮した住環境整備の方針を展望し，社会移動の鈍化，人口の高齢化，少産化，家族形態の多様化の中で専用住宅地が解体する可能性と，住宅地観が将来都市住宅観へと発展する必要性を述べている。

論文の審査結果の要旨

本論文は，近代工業社会の発展に伴い，都市と住宅が分離していく過程で形成される住宅地の分析を通じて住宅地観の存在を明らかにし，かつ，住宅地観が住環境形成に与える影響について論じたもので，その主要な成果は次の通りである。

(1) 住宅地観は，近代以前においては一般に都市観と未分離であったこと，近代においては工業化に伴う都市の人口集中，職住の分離及び核家族化の進行によって都市観と分離したこと，さらに欧米型の衛生思想の導入及び資本主義の発達に伴う階級文化によって山の手型住宅地観が，つづいて都心の環境悪化及び大量輸送機関の発達によって郊外型住宅地観がそれぞれ成立したことを見出している。

(2) 第二次大戦後は，以上の住宅地観のほかに，より一層の都市化，経済の高度成長及び家族構成における少産化を主たる要因として，都市における定住意識の発達，戸建持家の大衆化及び住宅の経済財的関心の向上を内容とする戸建持家型住宅地観が成立していることを明らかにしている。

(3) 戸建持家型住宅地観には，これを獲得する人々の願望が強く働き，住環境の形成や変容のプロセスにおいて場所イメージの慣性力を発生させて戸建持家の階層化を推進し，さらに宅地の流動化や細分化を促進していることを示している。

以上の成果は，これからの住環境計画に重要な知見を与えるとともに，生活基盤の拡大に伴い，住宅地観が将来都市住宅観へと発展する可能性をも示唆するものであり，環境工学上寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。